『今昔物語集』における動詞句「喜ヲ成ス」の性格について

――漢文訓読語と和文語との間――

青木　毅

目次

一、はじめに
二、問題の所在
三、平安時代における「ヨロコビヲナス」の使用状況
四、平安時代における「ヨロコビヲナス」の性格
五、おわりに

一、はじめに

『今昔物語集』（以下『今昔』、本文は岩波日本古典文学大系本による）の用語の性格については、すでに、様々な角度からの検討が行われてきている。その多様性については、もはや、多言を要すまい。これまでの研究において、『今昔』撰者の文体の性格が様々に規定されることになったのは、(1)その多様性に起因しているものと思われる。また、田中牧郎氏は、築島裕博士の示された、いわゆる「訓点特有語」の動詞について、『今昔』における使用状況により、漢文訓読的性格の強い語から逆に和文的性格の強い語まで、多様な段階の語が含まれていることを明らかにされたが、(2)このことは、同時に、『今昔』の用語の多様性を示していると言えよう。さらに、田中氏の右の指摘においては、漢文訓読語と和文語との

中間的な性格をもつ語の存在が示唆されているようでもあり、注目される。

このように複雑な性格をもつと見られる『今昔』の用語の内実を解明するためには、なお、新たな観点の導入が必要であろうと思われる。筆者は、これまでに、単語の組合せに成る「句」、特に名詞一語と動詞一語とが格助詞を介して結びついた、いわゆる「動詞句」をひとつの単位体として設定し、それをキーワードとして、『今昔』の用語や文体の性格を追究するという試みを行ってきた。(3) 本稿では、上記の試みの一環として、『今昔』における動詞句「喜ヲ成ス」を取り上げ、その性格について考察し得たところを述べてみたい。

二、問題の所在

(1) 『今昔』における「喜ヲ成ス」の巻別分布状況は、表①の通りである。

(表①)

句／巻	喜ヲ成ス	cf.喜ブ
1	1	18
2	1	26
3		14
4	4	20
5	2	29
6	1	11
7	1	16
8		
9	1	16
10	3	20
11	2	39
12		23
13		16
14		22
15		14
16		34
17		28
18		
19		20
20	2	20
21		
22		5
23		
24		8
25		14
26		23
27		4
28	2	7
29		14
30		3
31		13

この表によれば、「喜ヲ成ス」は、巻二十以前、特に天竺・震旦部（巻一～十）に集中して用いられていることが知られる。

なお、参考（cf.）として示したように、「喜ブ」については、巻によって多少のばらつきはあるものの、『今昔』のほぼ全体にわたって広く分布しているのである。したがって、「喜ヲ成ス」の分布の偏りは、〈喜び〉が表現される文脈の有無に左右された結果とは言いがたく、むしろ、「喜ヲ成ス」の文体上の性格に起因しているものと推測される。(4)

『今昔』においては、一般に、巻二十以前の文体は、漢文訓読調が強いと言われており、また、天竺・震旦部は、中国の漢文を出典や原典にもつ説話が大半を占めていると考えられている。とすれば、「喜ヲ成ス」は、漢文の表現と深いかかわりをもっているのではないかと予想されてくる。

（2）　ところが、出典文献との比較を行ってみると、右の予想に一見矛盾しているかのような結果が得られるのである。すなわち、漢文（乃至日本漢文）が出典である場合には、その出典に「ヨロコビヲナス」と訓読しうる表現（表記）が認められず（▲印は、該当する表現が存すべき箇所を示している。以下同）、

○然レバ、郡郷ノ人、皆、喜ビヲ成シテ、相共ニ此ノ堂ヲ助ケ造ル間ニ、皆心ノ如ク造リ得ツ。（『今昔』巻第七、第四十五）

○丶丶喜悦（邑里）而共助造堂宇。（切）頃之畢成皆如其志焉。（返）（前田本『冥報記』上巻、7）

○其ノ後、一年ヲ経テ、潘果ガ舌、漸ク生ヒ尋テ、平復スル事、本ノ如シ。其ノ時ニ、潘果、喜ビヲ成シテ、縣ニ詣デ丶、自ラ縣官ニ此ノ事ヲ語ル。（『今昔』巻第九、第二十三）

○後一年舌漸生。（切）尋平一復如舊。（切）▲詣縣自陳（前田本『冥報記』下巻、14）

○夢覚テ後、心ニ喜ヲ成シテ夢ニ見ル所ノ経ヲ尋ネ求ルニ、大和國、高市郡、久米寺ノ東ノ塔ノ本ニシテ此経ヲ得タリ。（返）（『今昔』巻第十一、第九）

○則生（ナス）隨喜尋求彼經於大日本國高市郡久米道場東塔下而得此經（天理本『金剛峰寺建立修行縁起』）

逆に、仮名文が出典である場合には、その出典に「ヨロコビヲナス」が認められるのである（『打聞集』は、出典ではないが、同文的同話であると認め得るので、出典に準じて扱った）。

○大師、是ヲ聞テ、喜ビヲ成シテ、此ノ人ノ後ニ立テ入ヌ。（『今昔』巻第十一、第十一）

○悦成テ、此人共ニ具入（『打聞集』第十八話）

○「人ニ値ヌ」ト思給テ喜ヲ成シテ、近ク寄テ見給ヘバ、早ウ、人ニハ非デ異形ノ鬼共ノ極テ怖シ氣ナル者共ノ行ク也ケリ。

（『今昔』巻第六、第六）

○「人ニアヒヌ」ト思テ、悦ヲナシテヨリテ見バ、エモイハズ怖ゲナル鬼ドモノイクナリケリ。（『打聞集』第九話）

右に見られた状況は、資料の制約による偶然にすぎないのであろうか、それとも、必然性のある結果なのであろうか。このような問題点をふまえた上で、以下、平安時代における「ヨロコビヲナス」の性格を検討する。

三、平安時代における「ヨロコビヲナス」の使用状況

まず、漢文訓読文については、次掲の訓点資料[5]を調査したが、用例は認められなかった。

小川本『願経四分律』平安極初期点・西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点・知恩院蔵『大唐三蔵玄奘法師表啓』平安初期点・東大寺図書館蔵『地蔵十輪経』元慶七年点・正倉院聖語蔵『地蔵十輪経』元慶七年点・石山寺本『法華経玄賛』淳祐古点・正倉院聖語蔵『弁中辺論』天暦八年点・石山寺蔵『佛説太子須陀拏経』平安中期点・石山寺蔵『沙弥十戒威儀経』平安中期角筆点・石山寺蔵『法華経義疏』長保四年点・西大寺蔵『護摩蜜記』長元八年点・西大寺本『不空羂索神呪心経』寛徳二年点・知恩院蔵『地蔵十輪経』康平三年点・天理大学図書館・国立京都博物館蔵『南海寄帰内法伝』平安後期点・兜木正亨師蔵『無量義経』平安後期点・立本寺蔵『妙法蓮華経』寛治元年点・龍光院蔵『妙法蓮華経』平安後期点・高山寺蔵『大毘盧遮那成仏経疏』永保二・長治元年点・宮内庁書陵部蔵『管見記紙背文選』院政期点・興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』承徳三・永久四年点・前田本『冥報記』長治二年点・神田本『白氏文集』天永四年点・広島大学蔵『八字文殊儀軌』永暦二年点・石山寺蔵『大唐西域記』長寛元年点

漢文訓読文における〈喜び〉を表す表現としては、今回の調査では、「ヨロコブ」「随喜ス」「歓喜ス」「随喜ヲナス」「歓喜ヲナス」などを見出し得た（「随喜ヲナス」「歓喜ヲナス」については、後掲の用例を参照されたい）。

○在昔、如來此處に行經(したま)ヒキ。時に彌猴有リ。蜜を持(て)佛に奉(る)。佛、水に和(せ)令(めて)大-衆に普-遍(したまふ)。彌猴喜ビ踊(ホドハシ)リて坑に隨(ママ)(て)〔而〕死ヌ。　（石山寺蔵『大唐西域記』長寛元年点、巻第四）

○或イは身の悪業、或(い)は語の悪(と)業、或(いは)意の悪業をもて、自も作り他を教(へ)たまひき。見ても聞(き)ても随喜セリ。　（正倉院聖語蔵『地蔵十輪経』元慶七年点、巻七）

○健(タケキ)人い、王の為に怨を除(き)つ、怨既に滅し已(り)て、王大(いに)歓喜す、　（兜木正亨師蔵『無量義経』平安後期点）

次に、仮名文については、次掲の仮名文学作品[6]を調査した結果、以下の用例を見出し得た。

竹取物語・伊勢物語・土左日記・大和物語・平中物語・多武峯少将物語・蜻蛉日記・宇津保物語・落窪物語・枕草子・源氏物語・和泉式部日記・紫式部日記・夜の寝覚・更級日記・浜松中納言物語・篁物語・狭衣物語・讃岐典侍日記・栄花物語・大鏡・堤中納言物語・今鏡・とりかへばや物語・松浦宮物語・水鏡・三宝絵詞・法華百座聞書抄・打聞集・唐物語・古本説話集

『宇津保物語』（一例）

①みこの君、「まことにしかあるべき物なり。あまたの人のよろこびをなさんに、我、一のねがひみたじやは」との給て、みちの人のしづめるざえをばおほやけにも申、はかせどもにもおほせ、いひところなく(ねどころカ)、くいものなきひとのためにとて、ぜに・きぬ・かね、くるまにつみていだしたて給。　（「藤はらの君」、上野宮の詞）

『大鏡』（一例）

②よの中の人の申やう、「太宮の入道せしめ給ひて、太上天皇の御位にならせ給て、女院となん申べき。この御寺に戒壇たてられて、御受戒あるべかなれば、よの中のあまども、まいりてうくべかんなり」とて、よろこびをこそなすなれ。　（第五巻、「太政大臣道長上」、世次の詞）

『栄花物語』（五例）

③かゝる程に法の燈火を掲げ、佛法の命を繼がせ給ふになりぬれば、嬉しく明なる御世に逢ひて、暗きより暗きに入れる衆生も、この御光に照されて喜びをなす。（巻第十五、「うたがひ」、地）

④身の中の佛性の煩惱（に）覆い隠されつるも、今宵の光にや光り出で給らんと喜ばれ、暗きより暗きに入りたる衆生の煩惱も、嬉しき會の燈明に會ひぬと喜びをなしたり。（巻第十九、「御裳ぎ」、地）

⑤かくてこの秋、御受戒あるべしとて、無量壽院辰巳の方に、夜を晝になして急がせ給へば、世界の尼ども喜びをなしたり。（巻第二十七、「ころものたま」、地）

⑥御心地も少し爽がせ給へば、「御湯殿」とある折は、鼎殿いみじう喜びをなして仕うまつるもあはれなり。（巻第二十九、「たまのかざり」、地）

⑦十四日のつとめて、「いかで湯少し浴みむ」と仰せらるれば、侍召して仰事たぶに、鼎殿喜びをなしていそぎ仕うまつれど、（巻第二十九、「たまのかざり」、地）

『水鏡』（二例）

⑧皇子見おとろき給ていたきたすけて位をつくことはきはまりなき大事なれはいまゝてうけとらぬことにて侍れともかくのたまひあひたることなれはあなかちにのかれ侍へきことにあらすとおほせられしかは一天下の人よろこひをなしき（第廿代　允恭天皇、地）

⑨あくるとしの四月に御門我身は女人也心に物をさとらす世のまつりことは聖徳太子し給へと申給しかは世の人悦をなしき　太子は此時に太子に立給てよのまつりことをし給しなり（第卅五代　推古天皇、地）

『三宝絵詞』（五例）

⑩太子王ノ御ム文ヲ讀ミ后ノ戀ヒ給フ事ヲ思テ菴リヲ出テ車ニ乘リ山ヲ返リ見テ涙ヲ落ス　國ノ人悦ヲ成シ道ヲ拂ヒ香ヲ燒キ樂ヲ調テ

太子ヲ向ヘ奉ル　（観智院本、上・四二オ1、地）

⑪童此事ヲキヽテ悲ノ中ニ喜ヲナス　涙ヲノコヒテツレナサマヲツクリテ例ノコトクニ飯ヲモテユク　（観智院本、中・四四オ8、地）

⑫且ハ經ノ文ヲヨミ且ハ哥舞（ウタマヒ）ヲトヽノヘタリ　神ノ悦ヲナシテ寺ノ守トナリニタリ　縁起ニミヘタリ　（観智院本、下・四三ウ8、地）

⑬此人昔貧シキ人トナレリキ　アマタノ僧ノ里ニイテヽアソヒ行ヲミテ心ニ悦ヲナス　イカテ供養セムトナケクニ家ノ中ニ物ナシ　野ニ出澤ニ行テ花ヲツミテ僧ニチラス　心ヲイタシテオカミ願ヲオコシテ去ニキ　（観智院本、下・五四ウ5、地）

⑭一偈ヲキヽテ喜ヲナスニ并ノ記ヲサトルト法師品ヲミテ知ヘシ　（観智院本、下・三一ウ5、地）

『法華百座聞書抄』（三例）

⑮昔、スレイセキ（朱齡石）トイフモノ、公ノ使（ヲホヤケ）ニテ、楊州（トイフトコロヨリ）船ニノリテ海ヲワタルニ、アシキ風、イテキタリテ、主禮（朱齡）セキカノレル船ヲフキハナツ。ユクヘモナクシラヌ海ノウラニハナタレテ、今ハ三月ハカリニナリヌラム、トオモフニ、海中ニヲホキナルシマヲミツケテ説（悦）ヲナシテ、イカニモシハシヲリテヤスマムトオモヒテ、船ヨリオリテ、山ヲノホルホトニ、山ノナカニ金銀ヲチリハメタルヒトツノタウ（堂）アリ。　（オ・117、地）

⑯五人マコトノ母ノコトク廿餘年カホトケウシツカフルホトニ、此女モノヲイハヌヤマヒシテイクハクモナクシテシナムトス。五人ノ子、心ヲヒトツニ（シテ）「ワレラヲノ〳〵此人ヲヒトリ母トタノミテ、年コロケウヤウシツ。今シヌルトキモノヲイハスシテシヌヘシ。ネカハクハ、天道アワレヒタマヒテ、モノヲヒトタヒモ、イハシメタマヘ」トイフニ、スナハチ、ヨクモノヲイフトキ、五人ヨロコヒヲナシテ母ニイフヤウ「トシコロワレラヒトヘニ

母トタノミテツカヘマウシツレト、タシカニナニ人トイフ事ハシリマウサス。モノイハヌヤマイツキタマヘルニ、天道ニ申コヒタリ。ワレラカタメニタシカニナニ人トイフ事ヲノタマヘ」トイフニ、女「ワレハ、マコトニハ太縣ノ楊ヤウマウトイヒシモノムスメナリ。（略）」トイフホトニ母シヌ。（オ・491、地）

⑰閻広王（魔）「孫居ハモロ〳〵ノ極悪ノモノトコソ思ヒツレ。キハマレル善人ニコソアリケレ。ソラコトニテモ、マコトニテモ、妙法蓮花經ト一ト度タヒトナヘツル人、イマタ地獄ニヲチス。トク女女（婆婆）ニカヘリテ、イヨ〳〵法花經ヲタモチタテマツレ」トイフニ、悦ヲナシテカヘルニ、（ウ・249、地）

『打聞集』（三例）

⑱道トホクシテ日クレヌ。留ルベキ所ナケレバ、タドル〳〵足ニマカセテ往間、ヲホクノ火トモシタル物、四五百人アヒヌ。「人ニアヒヌ」ト思テ、悦ヲナシテヨリテ見バ、エモイハズ怖ゲナル鬼ドモノイクナリケリ。（第九話、地）

⑲大師悦テ他國ニ逃シメ給間、玄ル山隔テ、人スミカアリ。城高付キテ、メグリ堅固タリ。一門アリ。前ニ人立リ。悦成テ問。答云、「一人長者家也。和尚何人ゾ」（第一八話、地）

⑳答云、「日本國ヨリ佛法學タメニ渡也。而、如是礼相也。暫安隱處ニカクレテ有ト思也」此門立人云、「此所ニハオボロケノ人不來」。極吉所也。暫此ニオハシテ、事平後ニ出テ佛法學也」ト云。悦成テ、此人共ニ具入門閉。（第一八話、地）

用例数として多いか少ないかは一概には言えないと思われるが、用例の現れ方に一定の偏りが認められる点には、注意する必要があろう。その偏りとは、用例が、『源氏物語』や『枕草子』などの和文の典型とされる文献には見出されず、漢文や漢文訓読語の影響の指摘される文献に偏って見出されるという、文体による偏りのことである。[7] すなわち、用例の認められる文献のうち、『宇津保物語』『大鏡』『栄花物語』は、和文の中では漢文訓読語の影響が比較的顕著に認められるものであり、[8]『水鏡』『三宝絵詞』『法華百座聞書抄』は、文章全体が漢文（乃至日本漢文）の出典を背景としている

ものであり、[9]『打聞集』は、『法華百座聞書抄』と同程度の和漢の混淆が認められるとされているものである。[10]

また、用例の中には、漢文との関係を具体的に指摘できるものもある。例えば、『栄花物語』の用例③④の文脈中に見える「暗きより暗きに入れる（りたる）衆生」という表現は、『妙法蓮華経』の次の箇所をふまえて記されたものと見られる。

○衆生は常に苦悩して　盲冥にして導師無し　（中略）　冥従（り）冥於入（り）て永ク佛の名ヲ聞（か）不

（立本寺蔵『妙法蓮華経』寛治元年点、巻第三、化城喩品第七）

さらに、『水鏡』の用例⑨・『三宝絵詞』の用例⑬⑭・『法華百座聞書抄』の用例⑮⑯は、それぞれ、次の漢文（乃至日本漢文）の文章を下敷きにして書かれた文脈中に現れているものである[11]（●印は、用例⑯の傍線部に該当する文脈が存すべき箇所を示している）。

（『水鏡』用例⑨）

○四月。勅曰。朕女人也。性不レ解レ物。宜二天下之政皆付二太子一。百寮万民聞而悦レ之。厩戸皇子爲二皇太子一。万機之政悉委二太子一。

（『扶桑略記』第三、推古天皇）

（『三宝絵詞』用例⑬）

○時諸衆僧。遊二行聚落一。到二諸豪族一。皆悉供養。時有二一人一。貧無二銭財一。見レ僧歡喜。恨レ無二供養一。即於二野澤一。採二衆草華一。用散二衆僧一。至心敬禮。於レ是而去。

（『賢愚経』巻第二、華天因縁品第十）

（『三宝絵詞』用例⑭）

○聞て妙法華經の乃至一偈一句を一念（そ）隨喜（せむものに）者我亦與授す阿耨多羅三藐三菩提の記を

（龍光院蔵『妙法蓮華経』平安後期点、巻第四、法師品第十）

（『法華百座聞書抄』用例⑮）

○宋時朱齡石者。使往遼東。還返失道隨風汎海。一月餘日達于一島▲糧米俱竭。入島求泉。漸深登山。乃見一寺。堂宇莊嚴非所曾覩。

（『法苑珠林』巻第三十九、伽藍篇第三十六、感応縁）

（『法華百座聞書抄』用例⑯）

○事レ之若レ親經二十四年一。母忽染レ患口不レ能レ言。五子仰レ天而歎曰。如何孝誠無レ感。母忽染レ患而不レ能レ言。若我有レ感使二母得レ語。應レ時能言。●謂二五子一曰。我本是太原陽猛之女。（略）語未レ竟而卒。

（『止観輔行傳弘決』巻第四之三）

このように見てくると、①「ヨロコビヲナス」は、少なくとも仮名文に用いられる表現ではあるものの、純粋な和文には用いられず、漢文や漢文訓読語の影響の認められる仮名文を中心に用いられていることが知られる。ただし、右に見るごとく、②用例の認められる仮名文の背景となっている漢文の当該箇所には、「ヨロコビヲナス」と訓読されるような表現（表記）が認められず、注目される。

今、右の①・②と、先に『今昔』の「喜ヲ成ス」について見た、(1)巻別分布状況・(2)出典文献との比較の結果とを比べてみると、それぞれ、ある共通の内容を含んでいることに気づかれるであろう。すなわち、(1)・①は、漢文の影響を背景にもつ文章に偏って用例が認められるという点、(2)・②は、用例が認められる文章の背景となっている漢文には当該表現が認められないという点で、それぞれ共通しているのである。このことは、(1)・(2)、①・②の結果が、偶然でないことを示唆しているようにも思われる。

右の調査結果を見る限り、「ヨロコビヲナス」は、漢文訓読語とも和文語ともつかない、あるいは両方の性格を合わせ持っているかのような表現とも見なし得る。それでは、漢文訓読語・和文語両方の使用が認められる和化漢文における使用状況はどのようであろうか。そこで、次掲の記録・文書類[12]を調査したところ、『平安遺文』所収の古文書に三例の用例を見出し得た。

貞信公記・九暦・小右記・権記・御堂関白記・左経記・春記・水左記・帥記・後二条師通記・長秋記・中右記・殿暦・永昌記・『平安遺文』所収文書

『平安遺文』所収文書（三例）

㉑仍去正月晦比、七十餘人杣工等、晦跡逃脱畢、去三月朔比、被下遣廳宣状云、停止領主之非法、於官物者立用御封之外、任徴符之旨、令辨濟國庫、於寺役者、任往古之例、无懈怠可勤仕之由、所被下知也、因茲逃散之民遙聞此由、成悦各令歸住、（「伊賀國在廳官人等解（保元三年四月）」）

㉒但所詮者、件高殿庄事、召對兩方被決眞僞者、三寶含咲、神明成悦歟、仍謹所請神判如件、敬白、（「僧欣西祭文案（嘉応二年四月十五日）」）

㉓還住之後至第五季（嘉永元年）十一月廿一日蓮華王院御幸之時、進參御堂之内陣、先年蒙流罪之時如令申上、爲當寺興隆、可被寄進庄園之旨、令訴申之處、即可有御裁許之由、被仰下畢、於是文覺流涙成悦罷出畢、（「僧文覺起請文（元暦二年正月十九日）」）

しかし、いずれも院政期後半の用例であることから、「ヨロコビヲナス」が、平安時代の和化漢文において一般に用いられる表現であったとは言いがたいように思われる。

なお、古記録においては、「為喜」「為悦」のような表記が見られたが、

○十九日、乙酉、從朝天陰、巳午時雨下、衆人欲歟間、未初程天晴、無雲氣、万人為喜、近衛使頼宗従東對立、事了參内、（『御堂関白記』、寛弘四年四月十九日条）

○按察大納言示送云、昨日官奏無失、爲悦者、依思一家事所被示歟、（『小右記』、治安元年十一月十日条）

これらについては、以下に述べる理由により、「ヨロコビヲナス」の表記ではないと判断した。すなわち、高山寺本『古往来』[13]には、「為喜」「為悦」と構成を同じくする表現（表記）として「為恐」「為憚」などが存し、それらには、次のよ

うな訓点が施されているのである。

返ゝ爲恐（57）　兼以爲恐（409）　傍倫爲憚（306）

訓点によれば、「為恐」「為憚」は、それぞれ、「オソレタリ」または「オソレトス」、「ハバカリタリ」のごとく訓読されたものと判断される。したがって、「為喜」「為悦」についても、「ヨロコビタリ」あるいは「ヨロコビトス」のように訓まれたものと考えるのが穏当であろう。

四、平安時代における「ヨロコビヲナス」の性格

ここで、平安時代における「ヨロコビヲナス」の使用状況についての調査結果をまとめると、次のごとくなろう。

1、平安時代の漢文訓読文には、今回の調査では、用例は見出し得なかった。

2、平安時代の仮名文では、漢文（乃至漢文訓読語）の影響の認められる文献に偏って用例が見出されたが、その背景にある漢文には、用例が認められない。

3、平安時代の和化漢文には、院政期の古文書に、用例が数例見出されるにすぎない。

右の結果より、平安時代における「ヨロコビヲナス」の性格は、どのように規定することができるであろうか。まず、用例が漢文訓読文に認められず、仮名文の方に認められることから、漢文訓読語と見なすことは困難であろうと思われる。用例の存する仮名文の背景となっている漢文に用例が認められないという現象も、右のことを裏づける事例と言えよう。一方、仮名文の中でも、和文の典型とされる文献には認められず、漢文の影響の指摘される文献に偏って認められることから、和文語と規定することにも無理があろう。また、漢文訓読語でもなく和文語でもないとすれば、記録語と考える余地もあろうかとは思われるが、実際には、用例は乏しく、しかも、院政期に到るまで見出しがたいことから、記録語とも言いがたい面がある。結局、漢文訓読語・和文語・記録語といった従来の範疇で、その性格を規定すること

は、困難であると言わざるを得ないようである。

そこで、ひとまず、調査結果の実態に即して「ヨロコビヲナス」の性格を把握しておくとすれば、次のようになろうか。

ⓐ用例の多さ・時代的な広がりなどの点から見て、基本的には、仮名文の用語であると言える。

ⓑただし、漢文の影響を背景にもつ仮名文に偏って現れる点から見て、漢文訓読語に通ずる性格を有していると思われる。

さて、ここで問題となるのが、ⓑで述べた「漢文訓読語に通ずる性格」の内実である。筆者は、これを、次の三点において認めることができるのではないかと考えている。

1 「ヨロコビヲナス」は、「(体言)ヲナス」という構造に置き換えることができるが、「(体言)ヲナス」という構造を有する表現は、漢文訓読文において次のように用いられている。

○衆の名花を以て遍ク〔ク〕場内に散せよ　上妙の香を焼(き)て而も供養を為(ナ)セ

(西大寺本『不空羂索神呪心経』寛徳二年点)

一方、仮名文においても、

○「なかずみにもしかおほせられて、『小將・兵衛佐(源宰相イ)、はらからのちぎりなしたり。きんだちもさるちぎりなせ』となむおほせられし。」

(『宇津保物語』、「としかげ」)

のように用いられてはいるが、次掲の表②に見られるように、『源氏物語』をはじめとする純粋な和文には必ずしも見出しがたく、『宇津保物語』などの漢文訓読語の影響が指摘される文献を中心に認められるのである。

（表②）

文献名＼類別	(体言)ヲナス	地の文	会話・心話・消息 (男)	会話・心話・消息 (女)	和歌 (男)	和歌 (女)
竹取物語 (10C)	1		1			
伊勢物語						
土左日記						
大和物語	2			1	1	
平中物語						
多武峯少将物語						
蜻蛉日記	1		1			
宇津保物語 (11)	31	5	21	3	2	
落窪物語						
枕草子	1		1 (性別不明)			
源氏物語						
和泉式部日記						
紫式部日記						
夜の寝覚	2		2			
更級日記	2		2 (性別不明)			
浜松中納言物語	1	1				

篁物語						
狭衣物語	1			1		
讃岐典侍日記						
栄花物語	9	8	1			
大鏡	4	1	3			
堤中納言物語						
とりかへばや物語						

12

とすれば、「(体言)ヲナス」という構造それ自体は、基本的には、漢文訓読文のものであると言えるのではないだろうか。(14)

2 さらに、「ヨロコビヲナス」は、「(動詞連用形転成名詞)ヲナス」という構造に置き換えることができるが、この構造をもつ表現も、漢文訓読文に次のように見出すことができる。

○若(し)此の経に於て疑を生(ナ)シテ信(せ)不(き)る者(もの)有ラハ　即當に惡道に墮(オ)チナム

(立本寺蔵『妙法蓮華経』寛治元年点、巻第五、従地涌出品第十五)

cf.○もしこの経(きやう)にをきて・うたがひをなして信(しん)せさることあらんものは・すなはちまさに・惡道(あくたう)におつへし

(妙一記念館本『仮名書き法華経』巻第五、従地涌出品第十五)

3 また、和語と漢語との違いはあるが、「ヨロコビヲナス」に、意味上・構造上きわめて類似した「随喜ヲナス」「歓喜ヲナス」という表現が、漢文訓読文に次のように見出される。

○善男子、若有ル衆生は、〔雖〕大乗に於て修習すること能(は)ヌ〔未〕ありとも、然も〔於〕晝夜六時に、偏に祖

右肩、右膝著地、合掌恭敬て、心を一にし念を専して、隨喜を作す時には〔ィヲ作セ。シカスル時には〕、福を得ルこと無量なり。作是テ言フ應し、十方世界の一切の衆生の、現在に施と戒と心慧とを〔施戒ト心ト慧トヲ〕修行するに、我レ今皆悉ク深ク隨喜を生す。是(の)如キ隨喜を作す福に由ル故に、必(ず)當に尊重殊勝の無上無等の最妙の〔之〕果を獲得(せ)む。是(の)如ク過去未來の一切の衆生に所有ル善根をも、皆悉ク隨喜す。

(西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点、巻三、滅業障品第五)

○復諸の疑惑無(く)して　心に大歡喜を生シて　自(ら)佛に作ル當シト知レ。

(立本寺蔵『妙法蓮華経』寛治元年点、巻第一、方便品第二)

右のことから、「ヨロコビヲナス」は、それ自体は漢文訓読文に見られないが、その構造は漢文訓読文のものであると言えるように思われる。すなわち、「ヨロコビヲナス」の「漢文訓読語に通ずる性格」とは、その構造において認められるものであったと考えられそうである。[15]

以上の検討結果をふまえて、『今昔』や平安時代の諸文献における「ヨロコビヲナス」の使用状況を改めてふりかえってみると、一見矛盾するような現象についての説明が可能となることに気づかれるであろう。その現象とは、漢文訓読文に認められない「ヨロコビヲナス」が、漢文の影響を背景にもつ文章に偏って現れるという現象である。結局、これは、「ヨロコビヲナス」の構造が漢文訓読文のものであったため、その性格上、漢文を背景とした文章に馴染みやすかった結果であろうと推測されるのである。[16]

なお、「ヨロコビヲナス」が、いつごろ、どのようにして成立したかについては、今のところ、『宇津保物語』以前に確例を見出し得ないため、[17]未詳とせざるを得ない。ただし、次のように、中国の漢文に「生喜」「成歓」といった表現(表記)が認められることには注意される。[18]

○論曰　由能無量作事立　由法美味欲徳成

釋曰。此偈示由五因故稱五喜。何者爲五。一因自能無量故生喜。（中略）諸佛法身同得勝能。是故生喜。由見證自界得此勝能。是故生喜。二因作事立故生喜。（中略）由見證自界作正事立。是故生喜。三因法美味故生喜。（中略）由見修多羅祇夜等經同一法身味。是故生喜。四因欲徳成故生喜。（中略）由見此二事成是故生喜。

（『摂大乗論釈』巻第十三、釋智差別勝相第十之初）

○潯陽江頭夜送客。楓葉荻花秋索索。主人下馬客在船。舉酒欲飲無管絃。
醉不成歡慘將別。別時茫茫江浸月。忽聞水上琵琶聲。主人忘歸客不發。

（『白氏文集』巻第十二、「琵琶行」）

「ヨロコビヲナス」が漢文訓読語に通ずる性格を有していることから考えても、右のような表記に基づいて成立した可能性は高いと思われる。[19] ただし、中国漢文における「生喜」や「成歓」が、平安時代の仮名文に見られる「ヨロコビヲナス」につながっていくとすれば、その過程を明らかにするためには、なお多くの論証が必要であろう。これについては、本稿で論ずる十分な用意がないため、今後の詳細な検討に俟つこととしたい。

五、おわりに

本稿においてたびたび指摘してきたように、「ヨロコビヲナス」が用いられる傾向のある文章とは、漢文の影響を背景にもつ仮名（交じり）文であった。換言すれば、漢文脈の要素を含んだ和文脈の文章とも言えるものである。このような文章を〝和漢混淆文〟という術語でひとくくりにすることは、必ずしも妥当ではあるまい。しかし、「ヨロコビヲナス」というひとつの表現を通して浮かび上がった、共通の特徴をもつ文章群は、和文・漢文訓読文・和化漢文に次ぐ第四の文体の存在を示唆しているかのようにも思われる。これまで様々な規定のなされてきた、『今昔』撰者の文体の性格を追究していく上でも、既存の文体とは異なる新しい文体の存在を模索することが必要になってきているのではないだろうか。[20]

注

(1) この種の研究については、山本真吾「今昔物語集に於ける『速ニ』の用法について」(『鎌倉時代語研究』第十一輯、昭六十三・八、武蔵野書院)、藤井俊博「今昔物語集の翻訳語について」(『国語語彙史の研究』十一、平二・十二、和泉書院)等において、整理されている。

(2) 田中牧郎「今昔物語集から見た『訓点特有語』の一面――動詞を中心に――」(『文芸研究』第百二十集、平元・一、日本文芸研究会)。なお、続稿として、同「平安和文の中の漢文訓読語をめぐって――『訓点特有語』とされる動詞の一考察――」(『学苑』第六百二号、平二・一)がある。

(3) 拙稿「いわゆる『出典に左右される文体』を通して観た『今昔物語集』撰者の文体志向――〝発病〟を表す動詞句『病ヲ受ク』『病付ク』の分布の偏りが意味するもの――」(『国文学攷』第百三十四号、平四・六)、同「『今昔物語集』における動詞句『老ニ臨ム』の性格について――『法華験記』との関わりを中心に――」(『鎌倉時代語研究』第十六輯、平五・五、武蔵野書院)、同「『今昔物語集』撰者の用語選択に関する一考察――〝発病〟を表す動詞句の改変をめぐって――」(奥津春雄編『日本文学・語学論攷』、平六・二、翰林書房)。

(4) なお、『今昔』における「喜ヲ成ス」の分布の偏りの意味するところを、より厳密に明らかにするためには、「喜ヲ成ス」と「喜ブ」との意味・用法上の差異についても検討する必要があろう。ただし、この問題については、「瞋(イカリ)ル」と「瞋(イカリ)ヲ成ス」、「恐(オソ)ル」と「恐(オソレ)ヲ成ス」などと合わせて考察する必要があると思われるので、機会を改めて検討することとしたい。

(5) 本文は、以下のものを用いた。
春日政治『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』(昭四十四、勉誠社)、中田祝夫『古点本の国語学的研究(訳文篇)』(昭二十九、勉誠社)、中田祝夫『正倉院本地蔵十輪経巻五・七元慶点』(昭五十五、勉誠社)、小林芳規『角筆文献の国語学的研究(影印資料篇)』(昭六十二、汲古書院)、小林芳規「西大寺本不空羂索神呪心経寛徳点の研究――釈文と索引――」(『国語学』第三十三集、昭三十三・六)、大坪併治『訓点資料の研究』(昭四十三、風間書房)、兜木正亨・中田祝夫『無量義経古点』(昭五十四、勉誠社)、高山寺資料叢書『高山寺古訓点資料第三』(昭六十一、東京大学出版会)、山崎誠「文選巻二(宮内庁書陵部蔵)管見」(『鎌倉時代語研究』第七輯、昭五十九・五)、築島裕『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究(訳文篇)』(昭四十、東京大学出版会)、尊経閣叢刊『冥報記』(昭十二、前田育徳財団)、太田次男・小林芳規『神田本白氏文集の研究』(昭五十七、勉誠社)、『訓点語と訓点資料』所収本文(小川本『願経四分律』・知恩院蔵『大唐三蔵玄奘法師紙背影印・翻刻並に解説』

表啓』・正倉院聖語蔵『弁中辺論』・石山寺蔵『佛説太子須陀拏経』・西大寺蔵『護摩蜜記』・立本寺蔵『妙法蓮華経』・広島大学蔵『八字文殊儀軌』)。

(6) 本文は、以下のものを用いた。

上坂信男『九本対照竹取翁物語語彙索引（本文編）』（昭五十五、笠間書院）、小久保崇明・山田瑩徹『土左日記本文及び語彙索引』（昭五十六、笠間書院）、曽田文雄『「平中物語」研究と索引』（昭六十、溪水社）、小久保崇明『多武峯少将物語本文及び総索引』（昭四十七、笠間書院）、佐伯梅友・伊牟田経久『改訂新版かげろふ日記総索引（本文篇）』（昭五十六、風間書房）、宇津保物語研究会『宇津保物語本文と索引（本文編）』（昭四十八、笠間書院）、田中重太郎『校本枕冊子』（昭二十八～四十九、古典文庫）、池田亀鑑『源氏物語大成（校異篇）』（昭二十八～二十九、中央公論社）、東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾『和泉式部日記総索引（本文篇）』（昭三十四、武蔵野書院）、東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾『更級日記総索引（本文篇）』（昭三十一、武蔵野書院）、小久保崇明『篁物語校本及び総索引』（昭四十五、笠間書院）、今小路覚瑞・三谷幸子『校本讃岐典侍日記』（昭四十二、初音書房）、秋葉安太郎『大鏡の研究（本文篇）』（昭三十六、おうふう）、榊原邦彦・藤掛和美・塚原清『今鏡本文及び総索引』（昭五十九、笠間書院）、鈴木弘道『とりかへばや物語の研究（校注編）』（昭四十八、笠間書院）、榊原邦彦『水鏡本文及び総索引』（平二、笠間書院）、岩波日本古典文学大系（伊勢物語・大和物語・落窪物語・夜の寝覚・浜松中納言物語・狭衣物語・栄花物語・堤中納言物語）、岩波文庫（紫式部日記・松浦宮物語）、勉誠社文庫（三宝絵詞）、小林芳規『法華百座聞書抄総索引』（昭五十、武蔵野書院）、東辻保和『打聞集の研究と総索引』（昭五十五、清文堂）、池田利夫『唐物語校本及び総索引』（昭五十、笠間書院）、山内洋一郎『古本説話集総索引』（昭四十四、風間書房）。

(7) 宮島達夫『古典対照語い表』（昭四十六、笠間書院）によれば、「よろこび」「なす」それぞれの使用状況は、次のようになっている（丸括弧内の漢数字は用例数）。

「よろこび」…万葉集（〇）・竹取物語（〇）・伊勢物語（一）・古今和歌集（〇）・土左日記（三）・後撰和歌集（〇）・蜻蛉日記（七）・枕草子（一〇）・源氏物語（三二）・紫式部日記（三）・更級日記（三）・大鏡（一一）・方丈記（〇）・徒然草（三）

「なす」……万葉集（一四）・竹取物語（五）・伊勢物語（三）・古今和歌集（四）・土左日記（一）・後撰和歌集（一一）・蜻蛉日記（一〇）・枕草子（一二）・源氏物語（七八）・紫式部日記（一）・更級日記（六）・大鏡（二八）・方丈記（七）・徒然草（二六）

これによれば、「よろこび」「なす」という単語のレベルでは、特に文体上の偏りといったものは認めがたく、したがって、

「ヨロコビヲナス」に見られた分布の偏りは、動詞句としての特徴であると考えられる。

(8) 春日政治「和漢の混淆」(『国語・国文』第六巻第十号、昭十一・十)、築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(昭三十八、東京大学出版会)第六章「仮名文学と漢文訓読」第一節「総説」、小久保崇明『大鏡の語法の研究』(昭五十一、おうふう)第五章「大鏡における漢文訓読語」等。

(9) 平田俊春『日本古典の成立の研究』(昭三十四、日本書院)第二篇第三章「水鏡の成立と扶桑略記」、山田孝雄『三宝絵略注』(昭二十六、宝文館)「三宝絵詞の研究」、築島裕注(8)文献、筑土鈴寛「唱導と本地文学と(一)」(『国語と国文学』第七巻第八号、昭五・八)等。

(10) 峰岸明『平安時代古記録の国語学的研究』(昭六十一、東京大学出版会)第三部第二章「記録語と和漢混淆文」第一節「和漢混淆文研究序説」。

(11) 加納重文「『水鏡』記事の独自性――『扶桑略記』との史料比較から――」(『女子大国文』第百九号、平三・六)、小泉弘・高橋伸幸『諸本対照三宝絵集成』(昭五十五、笠間書院)、山内洋一郎「法華百座聞書抄の説話」(小林芳規『法華百座聞書抄総索引』昭五十、武蔵野書院)。

なお、本文は、以下のものを用いた。

(12) 本文は、以下のものを用いた。

大日本古記録(貞信公記・九暦・小右記・御堂関白記・後二条師通記・殿暦)、増補史料大成(権記・帥記・左経記・水左記・永昌記・春記・長秋記・中右記)、平安遺文。

(13) 高山寺資料叢書『高山寺本古往来・表白集』(昭五十二、東京大学出版会)。

(14) なお、この構造をもつ表現は、和化漢文においても、次のように見出される。

○就中愚僧一音成佛事而不及　(享禄本『雲州往来』上、二五ウ4)

(15) 仮名文の表現でありながら漢文訓読語に通ずる性格をもつものとしては、かつて、橋本(現山口)仲美「今昔物語集の文体に関する一考察――『事无限シ』をめぐって――」(『国語学』第七十九集、昭四十四・十二)において、「事无限シ」について論じられたことがある。ただし、この「事无限シ」の性格については、舩城俊太郎「今昔物語集の『弥』をめぐって」(『国語学』第百三十五・百三十六集、昭五十八・十二、昭五十九・三)において、異なる見解が示され、また、藤井俊博「『事限り無し』考」(『京都橘女子大学研究紀要』第十七号、平二・十二)において、漢文訓読文(漢籍)にも見出される由が述べられている。

このように、「事无限シ」の性格についての見解は、必ずしも一定しておらず、同様に、「喜ヲ成ス」の性格についても、不明確な部分が少なからず残されている。したがって、この両者の性格を同一線上で理解すべきか否かについては、現段階では、確かなことは述べ得ない。

(16)「(体言)ヲナス」という構造をもつ表現が、漢文を背景にもつ文章に馴染みやすかったであろうことは、次掲の表③に見られるように、『今昔』において巻二十以前の方により多く分布していることからも伺われる。尤も、巻二十二以降にも少なからず見られるが、和文調が強いとは言え、純粋な和文ではもちろんない(漢文訓読語の要素もある程度含んでいる)わけであるから、本稿の趣旨には必ずしも矛盾しないと考える。

(表③)

句／巻	(体言)ヲ成ス
1	10
2	22
3	14
4	17
5	11
6	5
7	6
8	
9	10
10	10
11	8
12	8
13	9
14	10
15	3
16	5
17	13
18	
19	4
20	17
21	
22	1
23	
24	7
25	6
26	2
27	4
28	15
29	
30	
31	2

(表④)

句／巻	契ヲ成ス	～思ヲ成ス	喜ヲ成ス	瞋ヲ成ス	恐ヲ成ス
1		1	1	1	1
2	1	8	1	3	
3		4		1	
4	1	2	4	2	
5		2	2	2	2
6		2	1		
7	2	2	1		
8					
9	1		1	1	1
10	2		3	1	
11	3	1	2		
12	3				3
13	1	1			1
14	2	1			2
15	3				
16	5				
17	2			4	2
18					
19	1				
20	1		2	3	
21					
22					
23					
24	2				1
25				2	
26					
27					
28			2		
29					
30					
31					1

なお、『今昔』における「（体言）ヲナス」のうち、用例数が一〇例以上のものについてその巻別分布を示すと、前頁の表のようになる。

＊右の表における「瞋（イカリ）ヲ成ス」「恐（オソレ）ヲ成ス」には、「嗔（忿・怒）ヲ成ス」「怖（懼）ヲ成ス」を、それぞれ含んでいる。

(17) 『宇津保物語』以前の用例としては、確例ではないが、日本漢詩文に「成歓」の例がある。

○暫對清泉滌煩慮　況乎寂寞日成歓　（『凌雲集』、「夏日左大将軍藤冬嗣閑居院」）

○灑掃荆扉望風久　尊卑禮隔未成歓　（『文華秀麗集』、「春日左将軍臨況」）

(18) 本文は、以下のものを用いた。

大蔵経（大正新修）（摂大乗論釈）、平岡武夫・今井清『白氏文集歌詩索引』（一九八九、同朋舎）

(19) 久遠寺蔵『本朝文粋』には、「成歓」を「ヨロコビヲナス」と訓じた例が見られる。

○漢宮入内之夜。傍華輦而成歓（久遠寺蔵本「成」歓（ヨロコビヲ）」）。荒原送終之時。混松風而添哭。

（『本朝文粋』巻第十四、後江相公「為左大臣息女女御修四十九日願文」）

(20) 舩城俊太郎「今昔物語集の『弥ヨ』をめぐって」（『国語学』第百三十五・百三十六集、昭五十八・十二、昭五十九・三）、同「今昔物語集の三つの文章要素――「其レニ」をめぐって――」（『国語国文』第五十五巻第三号、昭六十一・三）においては、『今昔』の基本的文章様式を、和文体でもない、漢文訓読体でもない、変体漢文体でもない、院政期の口頭語を基盤とした、新しいひとつの文章様式であるとする考えが述べられている。

〔付記〕本稿は、平成六年度鎌倉時代語研究会夏期研究集会（八月十二日、比治山大学）における口頭発表を基にまとめたものである。発表の席上、小林芳規先生、山本秀人・山本真吾両氏より、貴重な御教示を賜った。心より御礼申し上げたい。